NY エッセイ 79

中瀬有紀

モンスーンがもたらした新しい風



At Berkeley Rep, Palomi Ghosh (Naani) and Namit Das (PK Dubey) in the world premiere musical ***Monsoon Wedding***, based on director Mira Nair's 2001 film.

映画監督ミーラー・ナーイル氏演出の新しいミュージカル『モンスーン・ウェディング』が、新緑の美しいカリフォルニア州のバークリー・レパートリー・シアターで開幕しました。2001年にヒットしたナーイル氏の自主映画を基に制作されたこのミュージカルは、インドとアメリカの間でしか見えない光と聞こえない音を再現するような、とても実験的でわくわくするプロダクションでした。

「インドとアメリカの違いは何？」なんて舞台製作のデザイン会議では聞けないような野暮な質問を、バークリーへ向かうときに乗ったUBERの運転手さんがたまたまインド人だったので、彼に聞いてみました。すでに『モンスーン・ウェディング』で頭がいっぱいの私とは全く関係のない彼が「そりゃ、結婚でしょう?!インドの結婚は全然違う！」というので、劇場に到着する前にすでに物語が始まっているようでした。彼の出身地であるインドのパンジャーブ地域は『モンスーン・ウェディング』の舞台でもあり、彼が話してくれた豪華な結婚式やモンスーン気候の雨について、そして階級や宗教を隔てた結婚があり得ないことは映画とミュージカルが私に教えてくれたとおりです。

照明家ドナルド・ホルダー氏のアソシエイトとして参加した私は、クリエイティブチームの中でも最後に加わったメンバーのうちの一人ですが、1年半ほど前から携わってきたという装置家の幹子・S・マックアダムス氏をはじめ、10年以上ナーイル氏と共に試行錯誤を繰り返したクリエイターの方々の挑戦は想像を絶します。ハリウッドで名高いナーイル氏と衣裳デザイナーのアージュン・バーシン氏、またブロードウェイで活躍するホルダー氏とマックアダムス氏などが制作した『モンスーン・ウェディング』は、映画と舞台、そしてインドとアメリカの“結婚”と言っても過言ではありません。多くの結婚生活が「幸せ」という一言だけで表現できないように、この巨匠らのやりとりは正真正銘の異文化交流です。特に映画と舞台は共に話を伝える媒体であるため、似ているだけに違いが顕著で、物語の伝え方と舞台の見方が最大の相違点かもしれません。例えば映画の方は場面の中心の出来事を　ディティールまで詰めて日常のように再現するのが得意で、舞台のほうは場面間のつなぎ方を含め舞台上の出来事をどのように観客と体験するか考察するのが得意です。

ミュージカル『モンスーン・ウェディング』の台詞はほとんどが英語ですが、歌詞は英語とヒンディー語が混ざっていて、それこそ現在のインドの生きた言葉だとナーイル氏は話します。世界を同じように見て似たような考えに賛同し単一言語を話す固定メンバーで長くものつくりを繰り返す阿吽の呼吸と、そうでない者同士がお互いの違いをリスペクトし今までにない新境地を見出す摩擦は、どちらも誰かの人生を変える作品作りとなる可能性を秘めています。しかし、ソーシャルメディアが世界を繋ぐ今、そろそろ個々の差異から何を学びどのように“結婚”を楽しめるかを考える時期かもしれません。異文化間のエゴにより悲劇を繰り返し今もなお殺し合いが絶えない世界のニュースを見て、社会が“異文化結婚”の荒波を乗り越え、毎晩スタンディング・オベーションで幕を閉じる『モンスーン・ウェディング』のような幕引きにならないものかと頭を悩ますこの頃です。